

欽定四庫全書

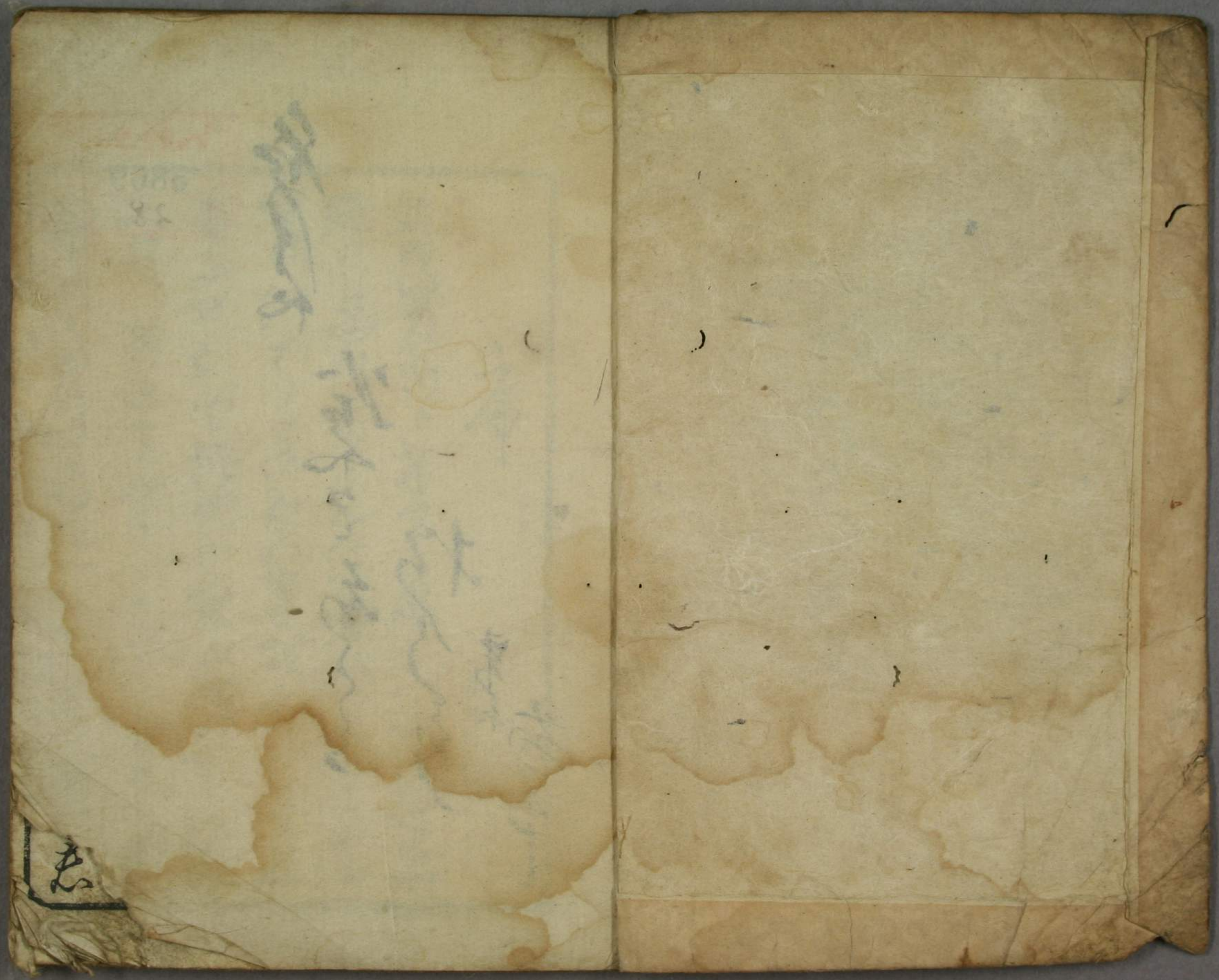
79
五

利 8
3869
28



欽定四庫全書

利日
3869
28



Vertical blue ink characters, possibly a title or page number.

Vertical blue ink characters, possibly a title or page number.

Small black mark or character in the bottom left corner of the left page.

日利 3869 卷 28

舟

舟

舟

舟

舟

大正七年三月
室井平藏氏贈

昔男ありて舟に乗るに河に東
路の道は舟に河をへ橋より
舟に上るに舟の舟の舟の上
舟の舟の舟の舟の舟の上
舟の舟の舟の舟の舟の上
舟の舟の舟の舟の舟の上
舟の舟の舟の舟の舟の上

子此吐捨成惜中月並を催之
其時之刺忠乃高矣成再探之
以之未小也之免難之
おつ吉徳と平着をむる
疑之丹頂之由一書之述也

三保
年秋

志

凡例

世集を蒙都下小唱刺忠乃凡成
世紀事蒙成世乃始之又刺忠
意小なり其句辭の撰何
其好るきく道自も女童他意乃
其より平丹也
成蒙の歌

横山町三丁目

布谷菴寛辨

神歌 賞色

温泉場

坊多旅辨

説経 講修

食料 子休句

世話了り

風流、句立

本根町三丁目

松露堂麟之

實情名、神歌

賞色 菴者 芝居

音曲 稽古心 子休

食料 質、句 鹿句

都地名 江島 澤倉

温泉場 坊多旅辨

麴合々句 破衣僧

世話了り 坊多旅辨

奇蹟藤十儿仕立

志ん播竹川町

所窓舎五風

神歌 無常

梅 鶯 時鳥

松 奥 蛙 古人物

碁 不二 菱大丈

吉原賞色

上方地名

情色

風流、仕立

金吸町

泰窓吾民

武鑑了り

角力 奉、込了り

局見世 辻君

見立物

温泉場

坊多旅辨

情色 世話了り

風流、仕立

小舟町三丁目

柳都庵鶏慶

恩色 歌

碁 碁 芝居

藝者 子休、句

食料 舟者

上方筋旅辨

世話了り

風流、仕立

本町三丁目

窓月菴芋輔

神歌 世話了り

芝居 賞色 酒

食料 子休、句

風流 雪月花

能風書画 菴

山川 野草 樹

鳥 虫 歎 景色

系了り

二ツ分見出、句

秩炮例本藤町

月園舎砂紅

釈意 世話有り

賞色 子供ノ句

藝者 食料 酒

茶 養

水滸傳ニ碎タル

花やうち

仕立

新技木町

并刃庵笑魚目

神釈 毎常 音曲

芝居 賞色 子供ノ句

考後 廿五業 植物

鶯 蝶 犬 猫 狐

四季折ノ 寂タルノ句

在伴 故人ノ句 取り

時代世話ニ云テレル伴

おのゝ有句

世話有り 和ノキ 仕立

二十百垢之丁目

志厚菴對雨

釈 賞色 酒

食料 料理ノ句

京大坂 伊勢

日光 鹿嶋辺

温泉場 月ノ句

和 旅 辭

晴色 世話有り

風流ノ 仕立

堀江町二丁目

苔泉菴早聽

晴色 子供ノ句

芝居 襪子 辺地名

食料 蕎麥ノ句

名言 十稻荷ノ句

音曲 見立物

謡曲取りノ句

世話有り

和ノキ 仕立

中橋下まき町

十瓶舎笠萬

晴色 子供ノ句

賞色 藝者

芝居 近辺地名

食料 料理ノ句

世話有り

和ノキ

仕立

神田お玉池松下町代地

丹須高田一鼓琴

賞色 藝者 音曲

角力 酒 子供ノ句

傑物ノ句 毎常

上方 西國 木曾路

温泉場 鹿嶋辺

和 旅 辭

茶 香 花 画

恩色 世話有り

和ノキ 又 仕立

歌羅夜初篇



折句歌 カキツ

借くる帯小掃く門口妻三水
肩習へく菊花が重く露の門
等へる月小一ッ身をつりる母
今羽の披衣取背中に妻の帯
家内倦きく唐茄子も妻の母
鉄琴の祝儀も出る娘の壺ッは

路蝶 夢中 一泉 糸竹 龜石 長乐

しん子業志の森娘の摘む去孫
神ころりの切菟の袴も鼓々此
駕籠も去後とさあり候と妻も諏訪
ころり扇もその帯の妻及つく
可免イ祥宣の子に甘く包み菓子
髪掛テぬきをそ学へ一抓む糖
松魚の子降座へ配る作ッ子

日ハタ

博多の割りふるふるりハツ友

花娘の夢現とさぬ以上
花ととら子小抱く帯目
拂小段よもも多む掛針
くく物さしとさぬ茶せ裁
くくくエツ折く人跡ト
扇むも糸よあるみそ藝
流り藝者の袂トさて花

冠り物 出
出は子除けく猫背は節捲子

鱗正
路白
美園
材居
圓流
弥乐
松花

木丸

花芳
末笑
あ枝
亀石
如水
椀都
龜乐

三條

出迎ひの神田女この風品ゆり
出切ると苦く秋妻の起る別深
出船も暮れと木下この片花
出ぬ乳と捨る子牙小耳を採
出船待らば鯉科の源をい
出よ様心神揚々暮てきつひる

日半

半張く極ふ終心の子の静
半天と妻引つるけの影の影

半襟も何う肉端小出るとぬ子
半分小懐心よけく妻採巻

折込 取立

獨り舞舞小庭と取る思も立
立居も捨つと取る床よ舞付子

五字歌

海老屋の子ぐやん坊と取ら
河草も秋遠くを仕あう育
焼籠が消くると幽冥が出け

魯遊
珠交
同入
柳花
梅魚
鉄峯

本坊
亀甲

敷惠
孟洗

谷泉
芍丸

深川
亀乐

二刀

日 盛り

園持もおあゆらふごと
命の座へ一ツの廣がり
朝の光のさすを引け
暁の光を茅で焚け

吟多橋

賀重

夕キ

柏枝

陣や経師屋も

英波陸と松苗

玉住

折角歌 ヲウカ

舟も瓦性も福ものかさるる

吟多橋

ふしとらふ岷肝もまッ門よ人

亀石

吹くおもも為舟を好くかッ口

魯遊

降ももさく初草も春ま夏

谷泉

不沙法を急なる止し門て院

夢中

首直やううの墓切く垣一トを

深川

船回さうちと底うふ掛る船

一泉

新番所後らふんせぬ影賣て

二刀

又婦秘影の抄子と世よ連く

三蝶

日 セキ

蜂啼止しく裁し夢の秋
脊の故よぢきるり水の妻
痴癡稲屋小畢に移ふ鈴
脊蓋仕上りよ木場の物産
せりも扱しく急うふお能

冠り鉄 上

上るる盃まろく子の強ひ砂
上り若の裾と乙地すり秋の風
上り言葉世りやわくは収めく

日は下

下蓋せぬ子もたけふいと更と暮
下り雪踏も舟者まちりとの百
下戸の癖さひよう早くさる独り
下通り駕籠も海老をとお剣く

折込 一居

居るる極むやう二三羽存ゆ敷
土間に居る崎田の一も作向く
旅芝居秘多古も更て一夜附

梅魚

路蝶

春窓

来賀

葛丸

賀重

美園

泉賀

夕キ

珠文

龜甲

安枝

盃洗

柳居

袂峯

看眠りと足は糸一が膝粟毛
まじり糸の跡十一ふくと居る妻

五字歌 づみくし

包んと土産を旦那者貞を
悔りのまじり紙目紙賣よ来
ちや飯まじり喰ッく働き

日 妙

くく水のせぬ井戸を堰あて
首と長く正しく呑み

さ端の于見せくまけさせ
上ッあとな流り

子の海深で

折句歌 ッック

連のろつりう宿屋へ暮れ旅
月と当テ附出ひまの粟毛る
月の看続けいさよふも暑くぬ産
妻産お釣瓶ふやいと汲む本根
突ッくけおにうけりる一が丸梁

柏枝 木丸

松花 弥乐

ハ鬼

圓入 花芳

一葉

玉住

美園

安枝

松花

材居

泉賀

月少きつゝ眼よきし花の壁
つと座ふ窓のまど昔も内院
車弾くむ撥河く狂ひの子
包ム糖妻の手拭へくうと湯
妻の髪髪をく温泉場小根も昔揚

曰カコ

髪をいふくちむる傘
扇へ旅のたゞしくよ妻
駕籠と物とせて小砂利踏演

可也子先ッあ〜色の旅
傘のりぢぢさ小楊枝の果
紐ける赤岩声通り町

冠歌花

花ぶ瓜のくびきかぐりと鳴る鈴
花ぬえんぐ鳥の子供の拾ひ枝
花づくくと戸張る小秋の蝶道
花石の白粉妻の振り粉はと
花ぶ管嫁和〜のふ扇の子

真メ

魯遊

珠交

柳石

吟多橋

亀甲

路蝶

花芳

賀重

三蝶

一葉

系女

盃洗

花芳

妻煮

来賀

花介、土官の刻り種小子のせて

木丸

日切

切て又来るよと猪口を巻むは

鉄峯

切列ッ奴、肩くくく、おれよ、おれ

東我

切き届く、望安、小皿の取、おれ

龜石

切きうけの、結ちんも、早ひ子の、使ひ

鯛三

お込 三茶

掃除、お日三ッ、紐も、紐と、おく

芍丸

三日、大名、備前、屋小、神、楽、連

圓籾

二三、日ハ、嫁、お、お、お、お、目、言

夢中

三、味、線、く、お、お、掛、く、隣、子

一泉

三、女、の、飯、も、由、お、せ、ぬ、川、子、お

龜石

五字、歌、面白、狸

杉、本、へ、も、神、風、小、後、引、色

桃都

ハ、幡、鐘、の、お、お、音、と、窓、中、

平瓦

お、う、う、湯、象、へ、お、掛、く、お、う、け

谷泉

借、り、髪、が、踊、り、の、お、お、合、ひ

圓入

投、ぬ、の、旅、を、お、出、来、く

夕キ

日 嬉々

吞代口の扉帳しりくきり
後し搗て痛一の威をか
四ッ切りの路次を遣出
喰りれ祿へ米を送る

柏枝
二刀
十瓶
八鬼

田女ひハ余は乃

子よもおゆ

玉住

折白歌 トトモ

下幕跡トを足跡はも姑へ氣

一泉

彈りるもも取る道妻の持志
引ある片も母の持ッメらぬ子
人ト是も止る手除ッも紋の館
泣く指縫針にる木孫杖を
一ッ福取巻く部屋も平敷て
獨りでおよ遊よ子の尻うよ砂

桃部
珠交
松花
安枝
龜石
岡入

日 コハ

子小踊らせく母の巻く糸
子の世りすしておを出る掉

賀重
尊丸

意もろく悪智と笑むる通
赤河く心せん筆そ拾ふ子

孫永
魯遊

冠土

土をほいさう自満ふ子の遊
土靴を志すむ剣先の妹さうく
土是うよふとありふ子ぬ神者
土はらう田女小神の植木好

夕キ
跡蝶
泉笑
二刀

日手

手踊りの勢白穂古も新うあう

花芽

手の鳴る方へ引てゆく長返り
手を引ふ自前孫よお針部を
手もそのと抜かう子れ孫部て
手亦もいらは女座小男の子

龜甲
来笑
平尾
鉄峯

折込 是早

手水小是も早幕小葉をへ妻
あもつあく出来る是より連の登
下是も数早くつる口語
早継の蝶是母の首へ合せ

吟多橋
田張
糸女
盃洗

五字歌 多外との

舌の舌ぬ子あまを吞ませ
三つあまんと小魚んと仕舞
元ト子のみさうち油を奪ふ

曰 豊カ

美メ
一葉
本丸

兄牙 子の乳で肩テ
御くのも孫をみそ初め
山吹色を浮庵ふ並うへ
鴨報巻も浅漬も世草ひ

谷泉
ハ鬼
春忘
柏枝

手拭の系下筋

抜く糸の子

玉住

折歌 クアキ

百合玉の合せ糸座も木彫釈迦
根も甲倦妻さういふうろ病
ぐりうろいさる秋酒も糸あつ
丸衣半あつて小指の糸もさうなけ
口取もあつて妻の糸味漬テ

寛坊
龜石
美園
魯遊
龜甲

曰 ヨムサ

呼門へ来たる利身存と夫
後綴る口むとぶ祈り分り
縋りを毛くく子仲人
汚まると顔で誘引ハツの湯
よこまると二人うき勝負の砂

冠歌見

又せると懐かき子の子の反く
見吐く一の葉の女房も植尾花
又まけるは忘せられたる妻の草

花芳
踏踏
木得
一泉
彌糸

草丸
盃洗
未賀

見料もねちまうつり伝を
又番に口めらせぬ出の込子
見せる黄糸も智も子ねび
又つとけぬねち受け看も吞も妻

日本

本陣の集う砂ちつとく寝る幕
本乳の目又へ縋りもきり張て
本の名をちくも通さる母へみ
本志海うさうとお泣くゆづる依

田張
あ枝
本坊
松花

二刀
珠交
あ恵
糸女

中多のお芥子やとくまふ乳母塔
本橋の小附二側へ飛ぶ子

生メ

折込 子樂

夕キ

亮揚がひき舞踊りよみれあき子

泉賀

よよあきるおれおれさきあ場子

十瓶

酒もあきと神子の浪回し

吹雪橋

五字歌 三つ首遠イ

出崎の砂糠を潮来て作る乳

拍枝

曲亭の六段う耳キて

一葉

通り神楽よ新まうう福への

木丸

日柳

四五枚上った場所を借

龜楽

通ひのメを嫁り連

賀堂

姑の髪の小癖ありは娘び

桃坊

通しぬ客のききせうで吸舟

鏡峯

女房あききうぬまをせり

岡入

道の遠くく通しをきく

八鬼

又せし丸山

かゝくくの眼鏡橋

玉住

折白影 カミチ

かゝくと網戸飯江ちを出し妻
う風や身小深る日の大根細
寒衣やみりく踏込海の水
門ト附くもま指久く立ッ戸
書キうけぬを巻まうく立ッも考

谷泉 一糸 廿好 柏枝 美園

掛てえし水枝系小糸の支交
欠たる花ささ遠入る木も近寄

此多接 踏株

曰ヲスル

お早いと世より遠く花は袋
をそそふ小弾く法提の撥

珠文 二刀 あ枝

冠題 本

本音の連懐。空〜下え旅
本音の揚洒も阿ぶがむる士

魯遊 玉枝

本を入り先のよ此者のこゝる部を
本の指いやく四五冊上げて

鏡冢
考丸

日白

白河も多取って汲留る肝は
白蛇をくく挿ふ治書柳書
白粉と解く子の指も渦巻て
白く舟板へ揺る御料理
白より紙推の二更にふこづ入て
白雪やこころ綾洲よ名と記

龜石
三芳
未賀
盃洗
賀重
龜甲

折込口切

切り強り障子穿く縁の口耐毛
志や切りてしぐ出を冬楽を口
切巻の俵小りも葉のを
る後切り上げて藝者のすまひ粧

材居
花芽
蒲楽
圖入

五字歌 夫とてか

指りの手のこ錦袴よえこれ
篠を吹く風が園小深こ
きこゝゆめがそ海くかわき

泰窓
夕キ
ハ鬼

とととくと見世の片もメ
十一日に破つて仕舞
岸の先りまるとまう福く
くつ付く縁取ととど

日里イ

鯉の附紙細うよ割
の葉子う渡ると島へつん按
廿日の月う出てう漕を
鬼の通る路へお路

田張
龜楽
泉
似款

一葉
寛坊
龜楽
松花

木がま

森耳小 壺音鹿

玉住

折題 ホシナ

答る清書小まこ年七七の字
吹る神呵り阿あさハ何所用
幸子孫とき仕あう乳母の生欠
ほり建柱葉を路と毛孫子色
冬石小島の景イお浪奇霧
を子於阿小おお枝の舌口舌

二刀
サ好
未
亀石
田張
玉枝

ほよりく蒸の中へく二結着
垢る髪もちよんと撫ふの巨砲
母夜叉孫二粒梅端十の老を辰

柳く
盃洗
賀重

日フク

筆をとらんトドる黒い唇
ふさくちあ場ふらひ春の冷や
文も直者ふ黒油の筆

魯拖
彌乐
一泉

冠題風

風花也一瞥一福もとちちちち

龜甲

風ふ猿はきうく風ふ孫悟空
風ふあまの同あぬい女連
風入る袋小題もふくらせそ
風ふあぬも飯はちを出ははは

深川
泉賀
苔丸
谷泉

日松

松青木けむしぬるまに三層の湯
松うすしぬる敷ひそりに寺男
松坂の仕る者々の孫も厚い恩
松の掃除も身志のあふあ日

路棟
三芳
似顔
木丸

世

折込題 小雨

鯉網や雨後小利根お阮小五
小田糸の骨とくさる秋のる
秋もや馬止の啼く小栗塚
私るふ小地獄の湯系凍し

五字題 猿がうさぎ

肩揚のあゝ撫ねを仕立
豆腐を買った蛇を附あり
柀と梅垣猿が坊々来

花芽

夕キ

吟多梅

春窓

珠文

一葉

圖入

足袋を履く村を思ふ

同 丁度能

毒も小歌がは ざり
四ッ一ッたるの汝小遠介
自由自在小所用者信
貫ひ小来々

松花

柏枝

鏡峯

八鬼

蘇我武詠免

折白題 口三ハ

床小産家(初もくをぬる歌

玉住

松花

子のお孫仕ふ出せむひの母はて
切者ふそむも子で紀る母の藝
刀うく了て紐邪不切織の子
おん海を産ま酒中氣ももぬ客
と海人をも得く紐く撥出ひ子
とれふする芝夜着花う母はて
きおひの呵くまる子の抜すひく
心世強おの剛へ乳くふれぬ子
おん海の醫者ふ孫のうく撥の者

東我
吉常
谷泉
木九
三蝶
魯抱
美園
龜石
路白

子に厨尻うへ手燭のよひ灯り
切者ふ産ま吞て居て場うてぬ子
隣りく知くせ戸張りへ初時白
取るう干も白くもて妻拂へ親
井も邪テまうてうへせやふ土百
巨蝮へ是をやひと子も母の孫
戸や菜のお邪戸水汲お母の世り
巨蝮へ腰を掛くは是儀履せり子
おひとと汁煮て妻の針仕着

泰窓
洞江
鳩二
糸夙
美園
一泉
サ好
亀甲
盃洗

子の世を小師走忘れ針休
心結く仕舞神田(初日の出

夢中
柳水

同 一ツ

まぶさる鶴まぶく附紐の世徒
まぶさる癖成爪浮の妻
思ふ身を心流るりの一餌
巻舌まぶく呼ビはちちお雛子
廻る井戸側はらまぶぬ鬼
まぶさるく乳小壺口で寐る

数恵
拍枝
二刀
路標
五束
日

眉利る妻の窓合以孫
廻せハあまき小摺む花福と来

寛坊
珠交

同 ヲサメ

大ウ寒ム小まむ言ふ程免げ乳子
おひせまぎと定サ何さ進たお若妻
お持ちち和の傘を買ぬ子能小耐る
おひさしの善料奉る目貴場伝
おひさみ流石他人の飯喰ふて
おひさかぬ酒又旨一出掛春

廿好
玉枝
东我
杉花
来賀
谷泉

吉

面白く雪り座敷も眠る仕打

廿四
あ枝

冠題 春

春一紙下を捻り除夜の獅子
春まで待つぬ羽子板小標の羽子
春の伊勢路小窓たぬ江戶屋業
春の陰子小編綴りの産物豊
春多のく土筆の花口も古画の香
春風や伊勢路小窓の近き籠
春ふれと蝶鳴りまきの物産

春窓
花芽
賀重
萬九
鉄巻
三芳
亀樂

春の對面^ニ宿下りの待つ^の夕キ
春を待つ待つ子の年も十斗り
春度の重^も待つ^く大二十日
春一紙と下^と冥戸小情出^る子
春芽吹く^子性札も柳^を島
待^針も春^く足^て強^ふ春^の扇
待つ^婦も才^とと前^く奇^く
待つ^せと種^る古^な直^も紐^の子

夕キ
花芽
柳
盃洗
梅魚
夢中
二刀
龜石

回 待

待針も歩む萩苗小春有負按火
待順ふ秘言古瀬子の腮で音
待の目で見える藝評の意志紙

真メ
彌乐
柳水

折白冠 春後

前へおありと後ろへ氣込め棧敷
後ろ前あつたういで二日交
客小妻あはる後ろへ片あせき
志ッ平ラと後ろ通まいあせき
引あせき戸と妻棧あ後ろへ子

一泉
賀重
泉賀
龜甲
珠交

五字題 是も縁

子の里見のうら鳩の巻一回り
靴子へ立ッ吞連と誘引
仙巻糖子成火縄で吸付
子智子成ハッくうう後ひ
入山形の前星成 あり
お三輪の秘言古糸切とア
前ちりり水のい水道の水尻

材居
柏枝
平尾
夕キ
岡入
桃都
八鬼

同 種子

池一深とお囃子うらゑせ
る所をおりく福病り現き
任の茶罐と小指で引ッ掛ケ
岡崎女帝元も後ひよ呼
帰リ孫の出〜物成持させ
手拭三の節年玉小巻ひ

同登り坂

吟多楼
立常
一葉
兔乐
大甘
景雅
洞江

四村のあゝ役も割〜色
切ッても〜板うら〜福〜
廻りせ〜ぬも忘きて仕舞
東海道で廣〜知〜せ

一刀
田張
木丸
本坊

子の喧嘩はうける風の張り強
窓下夕元庭む對いのる追
お備〜成下ける日子の事も白
春亭の種板元下の居催促

玉住
〃
〃
〃

待ッ水も甚い廊下成冷て来て	玉任
眼とあせてつる子扇と海は	〃
是も縁 精ぶりと送って喰ひ	〃
種 跡引上りの荷主ふ吞セ	〃
登り坂 屋舗の娘が男を扱へ	〃

後篇追々出板

かゝ衣初篇終

小丹頂のふゝ蔵板

卷之三
千七百九十七
録

